

## 【実践事例6】 愛知県立半田養護学校

### 1 地域支援活動の概要等

本校では、平成13年9月から地域支援活動の取組を始めた。14年度からは校務分掌として「地域支援部」を位置付け、教育相談を中心に活動を進めた。さらに、地域支援部の上位組織として、「地域支援委員会」を設け、地域の特別支援教育のセンター的機能を担うための本校の在り方を検討しながら、地域支援活動を継続し、その充実と拡大を図った。15年度からは、地域の小中学校の特殊学級担当者と本校教員が、交流しながら研修をする機会として、合同研修会を開催し始めた。

また、それに加えて今年度から、半田市立青山中学校のケース検討会での助言や巡回相談等の相談支援を実施するようになった。

次に、地域支援の具体的な四つの活動（相談、研修、情報提供、巡回指導）状況について示す。

#### (1) 特別支援教育相談の充実（市町の教育委員会との連携）

本校では特別支援教育相談を「ふれあい相談」という名称で、毎週火曜日と金曜日の午後、地域支援部の教員が相談会場に出向いて実施している。

##### ア 相談会場

交通の便がよく、教育相談を行う部屋と遊びを通して行動観察ができるプレイルームとを備えた場所を市町の教育委員会の協力を得て、借用している。平成17年度は次の会場で相談活動を行っている。

- ・半田市福祉文化会館（火曜日、金曜日）
- ・半田市立岩滑小学校（火曜日）
- ・武豊町立武豊小学校（金曜日）

##### イ 相談の方法と内容

相談は、電話での予約制で行っている。最も多いのは保護者からの相談で、親子で来談してもらい事例に応じて個別の面接、発達検査等を行っている。平成16年度の相談ケース数は56件（相談回数207回）で、平成17年度は11月末現在43件（相談回数132

回）となっている。年齢別に相談ケース数（表1）をみると小学校低学年が多く、特に小学校に入学したが集団での活動をはじめとした学校生活がうまくいかないという相談が増えてきている。

#### (2) 小中学校教員を対象とした研修会の実施（小中学校との連携）

「ふれあい研修会」という名称で平成15年度から夏季休業中を中心に年3回実施しており、今年

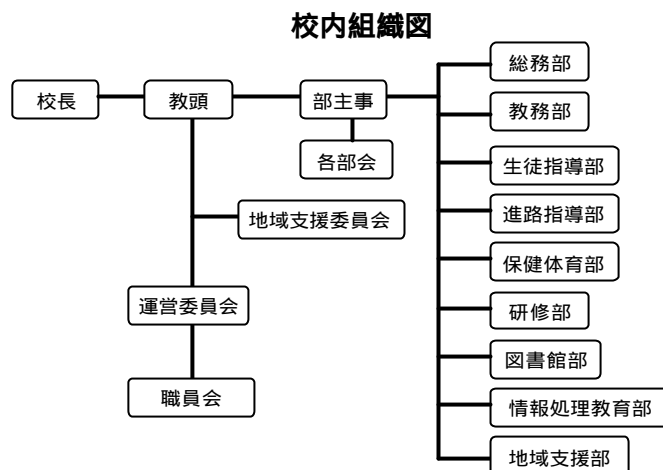
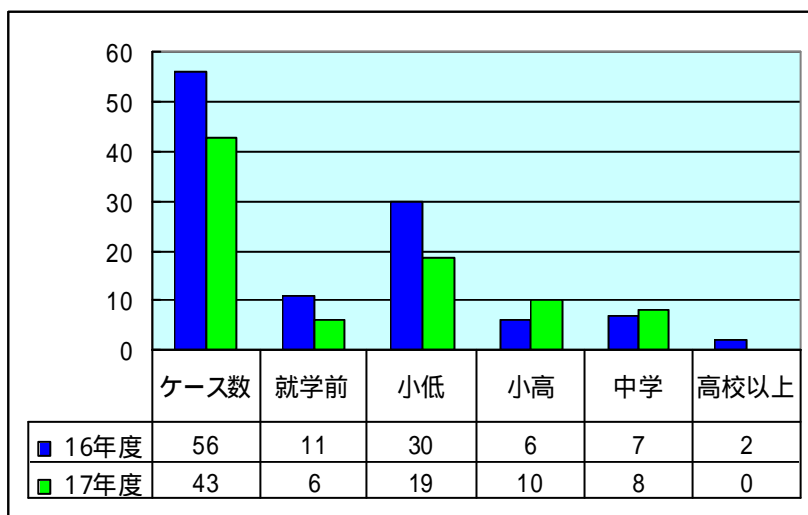


表1 相談ケース数



度で3年目を迎える。研修会の内容は、参加者の関心が高いテーマごとに分かれての協議会、半田養護学校の授業に参加しての研修、交流会（情報交換）や講演会である。今年度は、特殊学級担当者だけでなく、通常の学級担任の先生方にも参加を呼び掛けて実施した。平成17年度のふれあい研修会の実施期日や内容については次のとおりである。

「平成17年度 知多地域小中学校、養護学校ふれあい研修会」

<p><b>第1回 「テーマ別研究協議会と講演会」</b></p> <p>期日：平成17年7月27日（水） 場所：半田市福祉文化会館（雁宿ホール）</p> <p>内容：<b>テーマ別研究協議</b></p> <p>第1分科会 「教材教具について」 担当：半田養護学校教務部</p> <p>第2分科会 「教育支援計画について」 担当：半田養護学校教務部</p> <p>第3分科会 「進路指導、就労支援について」 担当：半田養護学校進路指導部</p> <p>第4分科会 「障害の理解と対応」 担当：半田養護学校保健体育部</p> <p><b>講演「特別支援教育の今後」</b> &lt;半田市教育委員会と共催&gt;</p> <p>講師 愛知県総合教育センター 研究指導主事</p>										
<p><b>第2回 「小中学校と養護学校の連携、交流会」</b></p> <p>期日：平成17年8月22日（月） 場所：阿久比町立中央公民館</p> <p>内容：<b>地域における養護学校の役割</b>（大府養護、ひいらぎ養護、半田養護学校の発表）</p> <p><b>交流会*</b> 小中学校教員と養護学校教員が交流を通して、日ごろの指導実践について情報交換し合い、今後の指導に向けて研修する。</p>										
<p><b>第3回 「知的障害教育の指導実践 - 教材のアイデアと体験 - 」</b></p> <p>期日：平成17年9月7日（水） 場所：愛知県立半田養護学校</p> <p>内容：<b>指導の実際と実技体験</b></p> <table border="0"> <tr> <td>授業参加</td> <td>小学部</td> <td>生活単元学習</td> </tr> <tr> <td></td> <td>中学部</td> <td>教科別の指導、生活単元学習</td> </tr> <tr> <td></td> <td>高等部</td> <td>作業学習</td> </tr> </table> <p>* 本校の授業に実際に参加し、指導の在り方、児童生徒へのかかわり方や、教材教具についての研修を行う。</p> <p><b>校内授業参観（公開授業）</b></p> <p><b>研究協議</b> * 参加した授業について、参加者と授業担当者が情報交換や懇談を行う。</p>		授業参加	小学部	生活単元学習		中学部	教科別の指導、生活単元学習		高等部	作業学習
授業参加	小学部	生活単元学習								
	中学部	教科別の指導、生活単元学習								
	高等部	作業学習								

(3) 地域への情報提供（地域の多様なニーズに応える全校的取組）

ア 地域支援委員会

「地域支援委員会」では、地域が求めているニーズは何なのか、本校が地域のセンター的な役割を担うためにどんなことができるかを検討し、校務分掌ごとにそれぞれができる内容を考え、実施に向けて取り組んでいる。取組内容は次のとおりである。

- |                         |                 |
|-------------------------|-----------------|
| ・教材教具ライブラリー作成 教務部       | ・学校便りの発信 総務部    |
| ・障害の理解と対応ハンドブック作成 保健体育部 | ・研修情報の提供 研修部    |
| ・進路指導ガイドブック作成 進路指導部     | ・施設・設備の提供 生徒指導部 |
| ・情報ネット構築 情報処理教育部        | ・図書情報の提供 図書館部   |

イ 主な取組の内容

**教務部：教材教具ライブラリー**

教務部が中心となり、本校教員が実際の授業で使用し、有効だった教材や教具を紹介するために「教材教具カード」（図1）を作成している。指導場面や指導方法を示し、多くの先生方が使用できるよ

うなものにしたいと考えている。今後は、集まった資料のデータベース化を進め、将来的には、インターネット上から閲覧し、活用できるようにすることを目指している。

**進路指導部：進路指導ガイドブック**

進路指導部では、進路指導や就労支援にかかわる問題の対処方法や情報をまとめたガイドブックの作成を行っている。具体的な内容としては、就労に関する相談窓口一覧とその手続き、就労するための基本的な力、離職の主な原因や離職後の相談窓口一覧とその手続きなどの項目についてまとめている。また、福祉施設の利用、支援費制度等についても掲載している。

**保健体育部：障害の理解と対応ハンドブック**

保健体育部では、障害の理解と対応についてまとめたハンドブック(図2)を作成している。本校在籍の児童生徒にかかわる障害から小中学校の通常学級に在籍する児童生徒にかかわる軽度発達障害まで、指導の概要から指導のヒント(子供たちの様子、判断基準、支援の基本姿勢)や、ふれあい研修会で出された質問や意見などをQ & A形式で分かりやすくまとめて、現場での指導に生かしているハンドブックにしたいと考えている。

部・教科・領域等	教材・教具名	分類(○をつける)
小学部 算数	どきどきゲーム	(自作) ・市販( )

こんなとき	こんな手だて
・1～10の数字の学習、10までの数字の順序数(右、左から○番目)の学習、計算問題など。	・数字カードをひいて、その数字の数だけ棒を数える。当たりの場合、人形が飛び出す。右、左のカードを使うことで右(もしくは左)から○番目の学習にも使える。数字カードを計算カードにすることで、実態に合わせた使い方ができる。

★ 使用方法(写真・図等)

(表) ペットボトルの人形

(裏) 人形をセットし、ゴムを棒にかける

<ポイント>

- ・ゴムがかかった棒が当たり。その棒を抜くと、ゴムのはずれ、人形が飛び出します。
- ・筒の色と棒の色を合わせ、色マッチングの学習にも使えます。

<材料>

- ・段ボール箱、ラップ芯(10本)、木の棒(10本)、平ゴム、ペットボトル、数字カードなど

図1 教材教具カード

## 指導のヒント (ADHD)

**子供たちの様子**

- ・自分の気持ちをコントロールするのが苦手である。
- ・小さいことで腹を立てることがある。
- ・自分の持ち物をなくしてしまうことがある。
- ・授業中、じっと座っていることができない。
- ・他のことが気になって集中できない。

**判断基準**

A.以下の「不注意」「多動性」「衝動性」に関する設問に該当する項目が多く、少なくとも、その状態が6か月以上続いている。

①不注意

- ・学校での勉強で細かいところまで注意を払わなかったり、不注意な間違いをしたりする。
- ・課題や遊びの活動で注意を集中し続けることが難しい。
- ・面に向かって話しかけられているのに聞いていないように見える。
- ・指示に従えず、また仕事を最後までやり遂げない。
- ・学習などの課題や活動を順序立てて行うことが難しい。
- ・気持ちを手中させて努力し続けなければならない課題を避ける。
- ・学習などの課題や活動に必要な物をなくしてしまう。
- ・気が散りやすい。
- ・日々の活動で忘れっぽい。

②多動性

- ・手足をそわそわ動かしたり、始末していてもじもじしたりする。
- ・授業中や座っているべきときに席を離れてしまう。
- ・きちんとしていなければならないときに、過度に走り回ったりよじ登ったりする。
- ・遊びや余暇活動におとなしく参加することが難しい。
- ・じっとしていない。または何かかに騒ぎ立てられるように活動する。
- ・適度にしゃべる。

③衝動性

- ・質問が終わらないうちに申し付けに答えてしまう。
- ・順番を待つのが難しい。
- ・他の人がしていることをささげったり、じましたりする。

図2 障害の理解と対応ハンドブック

(4) 巡回指導

巡回指導は、小中学校等の教員への支援、障害が想定される児童生徒への指導等を目的に、今年度から始まった。知多地域の巡回指導は、学識経験者及び本校とひいらぎ養護学校、港養護学校、春日井高等養護学校の教員がチームを組み、小中学校を巡回し、実際的な支援を行うものである。今年度は、知多地域の小中学校46校を84回にわたり訪問し、実際に対象児童生徒の所属する学級の授業を見せていただいた後、不適応行動の背景や学習困難の原因等を障害特性を踏まえ検討し、本人が安定

して学校生活を送ることのできる環境調整を行う、指示や課題提示において聴覚情報とともに視覚情報を併用するなどの具体的支援の在り方について指導助言を行っている。

## 2 半田市立青山中学校との連携

今年度から、特別支援教育の充実に向けて、どのように養護学校と小中学校がネットワークを構築していったらよいかについて、青山中学校と連携、協力しながら検討し、取り組んできた。本校が今まで実施してきた相談活動、研修活動、情報提供活動に加えて今年度から始まった「特別支援教育体制推進事業」における専門化チームによる巡回指導の経験を生かしながら、何ができるか考え実践してきた内容を以下に示す。

### (1) 巡回相談における連携

青山中学校に本校教員が出かけ、授業を参観したり、各学年のケース検討会に出席したりして、対象生徒への支援の在り方について協議、検討をした。小学校と違って教科担任制で教員が毎時間替わる体制の中で、生徒の認知、行動特性や心理状態等の実態を共通理解し、座席の位置や指示の工夫、意欲を喚起する配慮等について、指導方法や指導方針を決めていく取組は、今後の中学校での特別支援教育の参考になっていくと思う。

### (2) 研修会における連携

今年度実施した「ふれあい研修会」に青山中学校の先生に参加してもらったり、本校の現職研修に参加してもらったりする活動を計画した。また、本校の教員が青山中学校の現職研修やケース検討会に参加して支援の在り方について、一緒に考える機会を設けた。

実際には、日程的に、ふれあい研修会や本校の現職研修に中学校の先生方に参加していただくことが難しく、日程調整は今後の課題となってしまったが、中学校の先生方の熱意を感じることができ、支援の在り方を考えるよい機会になった。

## 3 実践のまとめ

今年度から始まった「特別支援教育体制推進事業」の巡回指導で訪問するのは、圧倒的に小学校が多く、中学校は授業の中で困っている子は少ないのだろうかという疑問があった。毎年行っている「ふれあい研修会」の参加者も小学校の教員が多く、中学校の教員は少ないのが現状である。青山中学校との連携の中で、中学校には小学校とは違った状況があることを知ることができた。中学校の教員は部活動や生徒指導上の問題等、日ごろの多忙な教育活動の中で気になる生徒を抱えながら悩んでいることを痛感した。今後は、青山中学校との連携を深める中で地域の中学校との連携や支援を考え、取り組んでいかなければならないと考える。

本校が地域支援活動として位置付けてきた相談活動、研修会活動については、形も整ってきたので、今後は地域の小中学校とのネットワークを更に深め、よりニーズに合った内容を取り入れていくことが課題である。情報提供を目指した活動については、まだ、作成途中のものもあるが、早い時期に地域に発信できるように今後も努力をしていきたい。また、今年度から巡回指導が始まり、地域の小中学校を訪問し、現場を見学する機会を得たことで養護学校に求められているニーズを知るとともに、少しずつ組織的なネットワークが広がってきたことを感じている。本校が地域の特別支援教育のセンター的機能を高めるためには、本校の教員が自分たちの役割を認識し、日ごろの教育活動を充実させるとともに、専門性を高めていくための努力をしていかなければならないと考えている。